

黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.80 (September 22, 2015)

第80号 2015年9月22日

例会発表要旨

4月例会 2015年4月25日 キャンパスプラザ京都

① ニューヨークの魔女狩り: 奴隷反乱事件と小説化

白川 恵子

今回の例会発表では、植民地時代のニューヨークで、窃盗と連続放火事件に端を発し、人々を恐怖と混乱に陥れた奴隷反乱陰謀事件について報告した。この事件は、しばしば1692年のセイラムの魔女狩りと近似の告発構造を示すと指摘され、セイラム判決以上の処刑者数を有しているにも関わらず、その認知度は格段に低い。また、南部奴隷制度やアンテベラム期の奴隷文学に関する研究の充実ぶりに比較すると、植民地時代のNYにおける奴隷反乱(1712年および1741年)の説明は、必ずしも多くはない。18世紀前半までに報告されたイギリス領北米植民地およびカリブ海諸島植民地における複数の奴隷反乱や、スペインとの「ジェンキンスの耳戦争」(1739-42)を背景とする本事件において、奴隷犯罪に対する大衆および為政者側の忌避感やスペイン＝カトリック陰謀説は、どのように形成されていったのか。また判事の一人として、「魔女狩り」を牽引した Daniel Horsmandenが事件終結後に出版した *Journal* (1744)から、司法関係者側のどのような意図が読み取れるのかについても、いくつかの具体例を示しつつ、考察した。さらに、NY奴隷反乱事件を小説化したテキストのうち、3作品——具体的には、Jean Paradiseの *The Savage City* (1955)、Ann Rinaldiの *The Color of Fear: A Novel* (2005)、Mat Johnsonの *The Great Negro Plot: A Tale of Conspiracy and Murder in Eighteenth-Century* (2007)——を紹介し、各々の作品の特徴について報告した。

② ニューディール期のアフリカン・アメリカン芸術家による壁画

深瀬 有希子

かつて Martin Luther King, Jr. がナイフで胸をさされて運び込まれた Harlem Hospital Center は、その事件よりおよそ 20 年前に、黒人芸術家たちの命を比喩的にも現実的にも救った場所であった。夜のレノックス・アヴェニューをきらびやかに飾る、まさに現代版電子壁画ともいえる作品は、それら黒人芸術家のひとり Vertis Hayes による *The Pursuit of Happiness* の一部である。今回の発表ではまず、Hayes の本作品および Georgette Seabrooke による壁画 *Recreation in Harlem* が、このハーレム・ホスピタル・センターにて制作された経緯と、現在の展示状況を示した(観覧には予約が必要、また館内写真撮影不可)。その次に、ニューディールの芸術家というよりも、むしろハーレム・ルネサンスを代表する芸術家として知られる Aaron Douglas が 30 年代に制作した壁画を取りあげた。それらのうち特に、いまや完全に失われてしまい、色彩も構図も不明である一枚の壁画に注目した。実はそれは、1936 年に開催された Texas Centennial Exposition のために制作されたものであり、おそらく唯一の記録によれば、16 世紀にフロリダからテキサス州を探検したアフリカ人 Estevanico を描いたものだという。本発表では、このダグラスの壁画やハーレム・ホスピタル・センターで制作された壁画群が、アメリカの前進を謳うニューディール時代特有のメッセージを発すると同時に共産主義的主張をもうっすらと盛り込み、かつ、アメリカの歴史文化にはその始まりからつねに黒人存在があったことを示していると論じた。



ハーレム・ホスピタルセンターの電子壁画

19世紀反奴隷制小説における間テクスト性

風呂本惇子

反奴隷制運動に関わる作家たちは、白人も黒人も、互いに先行作品から刺激を受け、何かを吸収し、それに反応する形で書き、情報も手法も”give and take, call and response”しながら、反奴隷制文学全体の水脈を太くしていった。当発表では、色白の奴隷の生涯を一人称でつづり、”slave narrative”の型を用いた「最初の反奴隷制長編小説」と見なされている Richard Hildreth の *The White Slave; or, Memoirs of a Fugitive* (1852)[ただし、1章から36章までは *The Slave; or, Memoirs of Archy Moore* (1836)として匿名で発表され、のちに37~59章が加えられたもの]を源に、そのなかで用いられている「逃亡奴隷の二重変装」、「子殺し」、「トラジック・ムラート」、「色白の混血者どうしの結婚」、「国外脱出の夢」といったモチーフが、他の作品にどう共有され、展開されているかをたどってみた。対象にした作品は、(長編だけを挙げると)、Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1852)、William Wells Brown の *Clotel; or, the President's Daughter* (1853)、Lydia Maria Child の *A Romance of the Republic* (1867)、Frances E.W. Harper の *Iola Leroy; or, Shadows Uplifted* (1892)である。Harper に至ると、この水脈は踏襲されながらも新たな流れに向かっていることがわかる。一方、たどってきた流れのなかで、Hildreth と Child が共に”interracial marriage”と”incest”の両方を扱っていることに焦点を当て、異人種間結婚の禁止されていた時代と場所では二つをセットにして描く小説が少なくないという現象に注目した。二人の作品を比較検討することにより、この問題に対する彼らの姿勢の共通性と差異を明確化し、そこに作品作成時の「時勢の要請」を読み取った。

エボニクスパラダイムの成立過程—イデオロギー的背景を中心に

源 邦彦

1970年代前半、ロサンゼルスで、エボニクス・パラダイム(合衆国黒人奴隷子孫の言語を英語ではなくアフリカの言語として記述するアプローチ)が提唱される。提唱者の一人は、カリフォルニア大学アーバイン校比較文化研究科博士課程大学院生のアーニー・A・スミスである。1948年、スミスはオクラホマ州タルサからロサンゼルスに家族とともに移住する。白人教員が大多数を占めるロサンゼルスの公教育ではじめて自身の母語が社会から抹殺されるべき病いとして扱われる。1957年高校卒業後は、ストリートライフで白人言語と黒人言語の鮮烈な差異を意識し始める。1959年以降、大学に入学しさまざまな社会運動に参加する中で、黒人の民族自決思想と密接に結びついた言語イデオロギー、すなわち合衆国黒人奴隷子孫はネーションとして白人言語(英語)とは異なるアフリカ系の言語を第1言語として所有するという明確な考えを持つようになる。1970年にアフロセントリックな指導教授陣が揃うカリフォルニア大学大学院に進学し、最初はエジプト学を志す。ところが学生運動での自身の言語使

用が原因でスミスは大学から起訴され、裁判では「黒人英語」学者の言語学的証言に助けられ無罪となる。これがきっかけで言語学に興味を持ったスミスは、黒人の子供の言語の文法的パターンが英語ではなく西アフリカ諸言語に類似することを発見、文法的な観点からエボニクスは「黒人英語」ではなくアフリカ系の言語であるという結論に至る。以前からの彼の言語イデオロギーが科学的裏づけを得ることになったのである。

報告

会員による出版

有馬容子・木内徹共訳(マーク・トウェイン著)『マーク・トウェインユーモア傑作選』(彩流社、2015年6月)、269 pp.

木内徹・西本あづさ・森あおい共訳(ヴァレリー・スミス著)『トニ・モリスン——寓意と想像の文学』(彩流社、2015年10月)

Kiuchi, Toru, ed. *American Haiku: New Reading*. Lanham, MD: Lexington Books, 2016.

赤尾千波著『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』(梧桐書院、2015年)、240 pp.

山本伸著『琉神マブヤーで一じ読本: ヒーローソフィカル沖縄文化論』(三月社、2015年)、253 pp.

松本昇・清水菜穂・馬場聡・田中千晶共訳(ヒューストン・A. ベイカー著)『ブルースの文学: 奴隷の経済学とヴァナキュラー』(法政大学出版局、2015)、439 pp..

佐川愛子訳(エドウィージ・ダンティカ著)『海の光のクレア』(作品社、2015年)、288 pp.

鵜殿えりか著『トニ・モリスンの小説』(彩流社、2015)、369 pp.

訃報

伊藤堅二氏 立命館大学名誉教授。黒人研究の会メンバーとして長年ご貢献いただきました。病の為 2015年5月23日逝去。90歳。

会員からの投稿

故伊藤 堅二 先生を追悼する (2015. 7. 23)

須田 稔

2015年5月23日、伊藤堅二先生は他界された。享年90歳。ああ、やっぱり永訣の時ってきた、というのが、ぼくのため息にくるまれたことば。不思議は、文学部アメリカ文学の永原誠先生の命日が、2013年だが、同じ5月23日なのだ。

僕が府立高校教諭を辞して立命館大学法学部専任講師となったのは1964年4月。シェイクスピア研究者の奥村三舟教授がおられたが、新任の僕へのガイダンスは専ら伊藤助教授の役目。その上、二人とも関心はアメリカ文学で、しかも「黒人問題」抜きにはアメリカを深く理解することは出来ないのではないかという認識を共有していた。翌1965年4月、産業社会学部の創設で、僕は移籍になって、英語担当者の人選からテキスト選定など、英語教育にかかわる教務一切の責任者になった。伊藤先生に相談に乗ってもらふことしばしばだった。

1965年だった。一橋大学の本田創造先生をお招きして、3人で、黒人研究の会の京都支部の創立、研究活動の集団化と恒常化を語り合った。しかし、これは夢に終わった。なぜか。伊藤先生は1961年12月から64年3月まで出町寮舎監、64年4月—69年3月、学思寮舎監。僕は1967年4月から68年3月まで、学部三役の一つ補導主事(のち学生主事、と改称)に就任、7月以降、「同和教育問題」をめぐる大学と部落解放同盟のあいだの激烈な抗争に遭遇したのだ。産業社会学部教授会が大学自治への不当な威圧的介入としてとらえたことを、「差別キャンペーン」と非難し、僕らの教授会をその元凶と指弾、教授会メンバー全員を2度にわたり糾弾集会に呼び出すに至った。三役の一人として、この数ヶ月は心身とも疲労困憊その極に達した日々だった。68年末に「学園新聞社事件」、69年1月に法人と大学運営中枢が入る「中川会館」が「全共闘」を名乗る学生集団によって暴力的に封鎖され、つづいて2月に産業社会学部の学舎「恒心館」が封鎖され、5月に「わだつみ像」が倒壊され、恒心館の封鎖が解除され、荒廃の広小路キャンパスに静穏だけは快復した。

伊藤先生は、他のすべての寮舎監とともに、「全共闘」によって監禁・糾弾される「大学紛争」の日々だった。教育も研究も二の次にさせた解放同盟は恫喝の、全共闘は物理的暴力を揮う非民主的・反人道的団体であると識った。

1969年5月の「わだつみ像」破壊の数日後の教職員組合大会で、僕は執行委員長に。71年半ばから半年、幼稚園から大学までの組合の連合体・京都私学教職員組合連合(略称・京都私教連)の初代執行委員長に。そして、2代目委員長が伊藤堅二先生。そして、日教組私学部副部長を1975年までお勤めになったのだ。こういう縁でもあった。

伊藤先生の労働運動指導者歴を付記しておこう。

1960—62年、近畿私学教職員組合連合書記長。

1961年と65年、立命館教職員組合書記長。

1967年、立命館教職員組合委員長。赫々たるもの。

ふつう、親交を結ぶ二人でも、互いの青少年期を語り合うことはめったにないのではないか。亡くなられて、退職記念論集(立命館法学会刊)を手にして、じっくり見ると、先生は1925年5月21日生まれ。1945年5月、応召、9月復員。なんと、僕の6歳違いの兄と同じなのだ。(兄は誕生日は5月5日)。敗戦まで約3か月の軍隊生活。その体験はついに何一つ聞い

たことがない。語りたくなかったのかもしれない。が、立命館の仲間である間は、そんなゆとりがなかったのだ。先生の略歴は、

- 1947年4月 第一高等学校文科乙類入学
- 1950年4月 東京大学文学部英米文学科入学
- 1953年4月 同大学院入学、翌年9月退学
- 1953年4月 株式会社旺文社入社(辞典課)
翌年8月退職
- 1954年10月 静岡大学工業短期大学部専任講師
- 1956年4月 立命館大学法学部専任講師
- 1958年4月 助教授
- 1867年4月 教授
- 1970年4月以降、外国語科連絡協議会運営委員長、
二部協議会委員長、人文科学研究所部落問題研究室長など歴任
- 1980年4—9月 Fisk 大学 Visiting Researcher
僕も約1ヶ月同行
- 1991年3月 定年退職 名誉教授に
伊藤堅二先生の研究業績を列挙しよう。

{論文}

- 1957年1月 抵抗と脱出——リチャード・ライトについて 『海潮音』13号
- 1958年12月 ノーマン・メイラー論 『外国文学研究』1号
- 1960年12月 ラルフ・エリスンの『見えない人間』について 『外国文学研究』3号
- 1966年11月 ジェイムズ・ボールドウィン試論 『立命館文学』257号
- 1967年4月 黒人作家の直面する問題—「抗議文学」の評価をめぐる 『世界文学』27号
- 1972年10月 ジュリアン・メイフィールド覚書 『外国文学研究』24号
- 1984年3月 ポール・ロブソンの生涯と思想—1930年代を中心に 『人文科学研究所紀要』37号
- 1986年7月 よりよい共同授業を求めて—分割授業の試み— 『外国文学研究』72号
- 1988年3月 ポール・ロブソンの生涯と思想—1939—58 『人文科学研究所紀要』44号

[翻訳]

- 1961年9月 『黒人作家短編集』黒人文学全集第8巻 (共訳) 早川書房
- 1977年11月 『世界短編名作選 アメリカ編』 (共訳) 新日本出版社

[著書]

- 1979年8月 『アメリカ黒人の解放と文学』(共著。僕も含め4人) 新日本出版社

[退職記念講義録]

- 1992年3月20日 私とローゼンバーグ事件 『立命館法学』別冊『ことばとそのひろがり』—
伊藤堅二教授・宮地國敬教授退職記念論集』

これは、先生の「あとがき」によると、定年退職記念最終講義は1990年12月20日に行われたのだが、「大幅に削除、追加をしましたので、あの日の話とは似ても似つかぬものとなってしまいました。ローゼンバーグ事件についてかなり詳しい解説を加えたためです。(中略)しかし、若い人々にはこの程度の解説にも触れる機会が少ないだろうと思い、多少の参考にはなるかと考えたわけです。しかし結果として、まるで、脱線に次ぐ脱線のような文章になってし

まいりました。また、専門外の法律関係の概念や事実を素人の無謀さで扱っていますので、とんでもない間違いをしているかもしれません。間違いとか、不審な点がありましたらご指摘いただければありがたく存じます。」と謙虚。

アメリカには、ほかにサッコ・ヴァンゼッティ事件もあった。また、マッカーシズムというヒステリックな反共・赤狩り運動・思想が吹き荒れた時代もあった。2014年以降の白人警官による黒人青年射殺が頻発、Black Lives Matterなる闘いがWhite Supremacy体制にむけられている。伊藤先生の問題意識を深めねばと思う。先生に感謝し、ご冥福を祈るのです。合掌。

記録と記憶とを糧に——ケンブリッジより

柳楽 有里

時が経つのは早いもので、前回の会報で冬のケンブリッジについて書いてから半年が経過した。ハーバード大学での留学を終えて、7月末に無事帰国したことをまずご報告する。さて、早速ここで一つ訂正しておかなければならないことがある。前回の会報でボストンは過去二番目の積雪量と書いたが、その後も順調に雪が降り続けたことにより、最終的に2015年の冬は「Snowiest Year」になったようだ。私の留学はこのような記録的な積雪量からスタートした。

2015年1月20日からVisiting Fellowとしてハーバード大学に留学し、授業を聴講しつつ、研究を進めたことは前回ご報告した通りである。その後、この留学が私の研究にいかに関与を与えたかについてここで少し触れておきたい。今回の留学の目的は、博士論文の二章を書き上げることで、その為にヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア(Henry Louis Gates Jr.)教授のアドバイスを仰ぐことだった。多忙なゲイツ教授とどうアポイントをとるか、が最初に直面した問題であった。しかし、そのような心配は必要ないとわかった。実際にお会いしてみると、教授はとてもフレンドリーで、毎週のようにオフィスアワーに研究室を訪れても笑顔で対応してくださった。最終的には、論文についてのコメントをいただくことができた。また、帰国間際までかかったが、計画通り論文も二章をほぼ書き終えたので、この留学の目的の殆どは達成されたと感じている。

このゲイツ教授の週一回のオフィスアワーは、基本的に独立して研究を行っている私にとって唯一の心の支えだった。オフィスアワーといっても、何度も面談をお願いするのは大変だった。実際のところ、オフィスアワーにたくさんの人が押し寄せるため、一時間程待っても数分しかお話できないことが度々あった。ところが、この無駄に思えた長い待ち時間が、結局のところ私にとって貴重な時間になった。同じように面談を待っているのは、アフリカン・アメリカンに関する研究を行っている学生や研究員ばかり。共通の興味や関心を持っていたので、自然と会話が弾み、待合室で交流の輪が広がっていった。知り合いになった学生からセミナーに誘われたり、また彼らと意見交換を行ったりすることができた。

反省点は、授業以外にもセミナーやワークショップが提供されていたにもかかわらず、最初のころは殆ど参加できなかったことだ。こういった情報は自ら積極的に探していく必要があるが、情報を把握できていなかったため、気がつけば既に終了していたセミナーなどが多々あった。暫くすると、大学が主催したセミナーのなかには、インターネットでライブ中継されたり、また後日YouTubeにアップロードされたりするものがある、ということがわかり、インターネッ

トを活用して様々なセミナーに実際に参加した気分を味わうことができた。ハーバード大学の柔軟な対応に感謝している。

私は大の野球ファンではなかったのだが、4月になると過ごしやすくなったので、レッドソックスの試合を観戦しにフェンウェイ・パークまで足をのばした。私が観戦したのは4月14日の試合だったのだが、ちょうどその翌日にあたる4月15日が「Jacky Robinson Day」であったことをあとから知った。この日は、アフリカン・アメリカンであるジャッキー・ロビンソン (Jacky Robinson) がメジャーリーグでデビューした日として知られており、彼の雄姿を称え、選手たち全員が彼の背番号の42番を身につけてプレーをするそうだ。彼については映画『42--世界を変えた男』(2013)で取り上げられている。

この日の試合を直に見ることはできなかったのだが、この野球界全体のイベントのことがとても気になった。グロリア・ネイラー (Gloria Naylor) が *Bailey's Cafe* (1992) でロビンソンについて少し言及しているからである。アフリカン・アメリカンたちはロビンソンをどう受け止めているのだろうか。ニグロリーグからメジャーリーグに昇格できた英雄として純粋に称えているのだろうか、それとも有能な人材探しに行き詰まった白人球団幹部のブランチ・リッキー (Branch Rickey) の目に偶然止まっただけだと少し批判的に見ているのだろうか。厳密にいうと、ロビンソンは最初のアフリカン・アメリカン・メジャーリーガーではないらしい。しかし、人それぞれ様々な意見があると思うが、野球というフィールドで人種差別を乗り越えた偉大な選手の一人としてアメリカ人の記憶に残る選手になったことは間違いない。そして、こういった努力の一つ一つがのちに起こる公民権運動の原動力となったのだ。

さて、私が観戦した14日の試合だが、手に汗握る接戦だった。八対七でレッドソックスが勝利したが、終始息もつけない緊張感の連続だった。最後の抑えに、日本人の田澤純一選手と上原浩治選手が登場すると、この緊張感はさらに増した。彼らは期待を裏切ることなく一点差で見事に逃げ切りほっとしたのだが、それと同時に、二人に対するポストニアンの声援に心を打たれた。様々な人種の選手たちが少なくともフィールド上ではフェアに扱われているということを実感できた瞬間だった。

「記録よりも記憶に残る選手を目指す」というフレーズを野球選手の口から時折耳にする。ゲイツ教授と面談をしている際、「先生は私の名前を覚えていますか？」とお訊きしたことがある。「毎週のようにやってくるあなたの名前はもちろん覚えていますよ」という返事が返ってきた。今学期中に教授の研究室のドアをノックした回数は、アシスタントの方の次に多かったのかもしれない。この訪問回数記録のおかげで「記憶に残る研究員」になったのだろう。今回の私のアメリカ留学は、記録的な雪から始まり、その後厳しい季節を乗り越えて様々な経験を積んだ。それら全てを記憶に刻み込み、今後はこの記憶を糧に研究に励んでいきたい。最後に、お世話になったゲイツ教授に感謝の意を込めてこの報告を終えたいと思う。

入 会 者

原 百年(はら ももとし)氏

所属:山梨学院大学法学部政治行政学科 (教授)

自己紹介:これまで私は、主にナショナリズム理論の研究をしてまいりました。ケースとしては、中国のウイグル族を主に扱ってきました。ナショナリズム研究を進める中で、「ブラック・ナショナリズム」の研究が実はアメリカで盛んに行われてきたことを知り、大変興味を持ちました。今後、ケースとして取り上げて、研究を進めていきたいと考えております。いろいろと教えていただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

木田 悟史(きだ さとし)

所属:三重大学人文学部 (特任准教授)

自己紹介:ラフカディオ・ハーンを中心に研究を進めております。日本に来る前のハーンはニューオーリンズで活動しており、19世紀末の南部ローカルカラー文学と深い繋がりを持っていました。また、マルティニク島にも滞在し、クレオール風俗を活写した旅行記・滞在記や、島の混血の女奴隷を主人公にした小説も書いています。日本時代と比べるとあまり知られていないアメリカ南部・西インド諸島での活動を研究し、ハーンの新しい一面を発見できればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

岡島 慶(おかじま けい)

所属:目白大学外国語学部英米語学科 (専任講師)

自己紹介:これまで Ralph Ellison を中心に 20 世紀アフリカ系アメリカ文学を研究してきました。ニューヨーク州立大学バッファロー校では、詩人であり作家でもある Alexis De Veaux 教授のもとでアフリカン・ディアスポラ文化論を学びました。以来、英語圏におけるトランスナショナルな黒人文学・文化の展開を主な研究対象とし、最近では Ben Okri や Chris Abani, Chimamanda Ngozi Adichie といったナイジェリア系の作家に関心を寄せております。会の皆様から色々ご教授頂けますと幸甚に存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

山田 優理(やまだ まさよし)

所属:同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 / 日本学術振興会特別研究員 (DC2)

自己紹介:専門はアメリカ研究です。とりわけ、アフリカ系アメリカ人の歴史とポピュラー音楽に興味があります。現在は、ジャズ音楽のファンに焦点を当てた研究を博士論文のプロジェクトとして進めています。(1) 彼ら／彼女らが、個人として、また集団として、どのような活動に従事していたのか解明すること、および (2) 音楽作品や実演がファンに与えた影響、またファンの存在ないし活動が演奏家の音楽創造活動に及ぼした作用について、これらの人々を取り巻く社会状況に鑑み、歴史的考察を加えることを目的としています。どうぞ宜しくお願い致します。

(順不同)

会計からのお願い

- ① 2015 年度会費未納の方は至急下記口座までお振込みください。
年会費： 6 千円
振替番号：00910-6-148435
名義人： 黒人研究の会
- ② 黒人研究の会ホーム・ページ(<http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/>)
の「入会案内」からPayPalで会費を納入できます。ご利用ください。(但し、PayPalご利用
の場合は、手数料300円が加算された6,300円が毎年自動振替となります。)

編集後記

会報に関して、2015年7月執行部会議で、次のとおり変更することに決定いたしました。これまでの会報も黒人研究会ホームページに掲載はしておりますが、第80号よりメーリングリスト会員にはホームページアップのご案内をするだけで、以前のように印刷の上、郵送することはいたしません。経費節減のため、ご協力のほどよろしくお願い致します。(但し、郵送会員につきましては、これまで通り郵送いたします。)

(井上 怜美)

<編集> 黒人研究会・編集部
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

<編集者> 井上 怜美

ホーム・ページアドレス
<http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/>
